

# 文化背景による呼称の相違

—— 中国語と日本語の親族呼称を中心に ——

呉 世 平

---

## 一. あるエピソードから

それは数年前のことであった。日本語を二年間ぐらい勉強した二人の中国人研究者と一緒に、ある日本人の家でお正月を過ごしていたが、ある日、その二人の中国人研究者は、「この家のご主人は奥さんの尻に敷かれていますね」と話し合っているのを聞いて、「どうして」とその理由を尋ねてみたら、「だって、ご主人はいつも奥さんのことを『おかあさん、おかあさん』と呼んでいるんじゃないですか」という答えが返ってきたのである。それを聞いて本当にびっくりした。今まで何も考えないで聞き流していた言葉であるが、よく考えてみると、たしかにおかしいもので、本当は自分の「妻」なのに、どうして「おかあさん」といった母親の概念を表す言葉で呼んでいるのであろう。「お母さん」という言葉は、「日漢字典」や「日中辞典」などを何冊調べてみても、「妈妈」「母亲」というふうになっている。中国語の「妈妈」などの母親概念を含んだ呼称には、大変な尊敬の意味あいが含まれ、ふつう自分の本当の母親にしか使えないのである。こういう言語背景を持つ中国人から見れば、自分の妻を「おかあさん」と呼んでいるその家のご主人は本当に情けなく、弱々しい旦那さんとして映ったかも知れない。勿論、なまはんかに外国語を理解しようとするのはいけないことである。

「コトバ」というものは本当に恐ろしく、その言語の文化背景を知らなけ

れば,こんなにも誤解を招くなんてと思い知らされ驚いてしまったのである。

本稿では,中国語と日本語の親族呼称を中心に,その相異点を探ることを目的とする。

## 二. 親族呼称の家庭内の使い方

人間はこの世に生まれてから,特殊なケースを除いて,誰でも親類を持ち,そして,お互いの役割を確認し,関係を維持し,コミュニケーションを行うためには,親族呼称を用いなければならないのである。しかし,世界に現存するさまざまな民族が,その社会構造や文化背景などによって,親族呼称は多様性を呈している。これは民族によって,親族関係のありようが異なり,そして強調され,重要視されているところに相違があるためである。例えば,エゴ(ego)の属する世代のすべてのメンバーの間では,すべて兄弟姉妹と同じ名称が用いられ,親の代でもすべて父母と同じ名称が使われている民族があると思えば,その一方,母系的な体系で,世代メンバーよりも直系(タテの関係)が強調されている民族もある<sup>1)</sup>。では,現代中国語と日本語の親族呼称がどうなっているか見てみよう。

### 1. 複雑で細分化と簡単で概略化

表 1

中国語		日本語	
父親	爸爸	父	お父さん
母親	妈妈	母	お母さん
兄	哥哥	兄	お兄さん
姐	姐姐	姉	お姉さん
兄弟	弟弟	弟	弟さん
妹	妹妹	妹	妹さん
男孩	儿子	息子	息子さん
女孩	女儿	娘	娘さん

## 文化背景による呼称の相違

表1から分かるように、直接血のつながっている、父母、兄弟、親子の概念を表す呼称はほとんど同じである。ただし、日本語では、「父、母、兄、妹」などのような、他人との会話で自分の家族に言及する場合にしか使えぬ呼称のグループがあるが、中国語ではそういう制約がないのである。そして、言葉としては対応をなしているが、実際の使い方にはいろいろな相違があり、例えば、日本人の夫婦同士で、父親、母親の概念を表す言葉で呼びあうことが可能であるが、中国語ではそういう表現がなされない。また、日本語の場合、目下の概念を含む呼称（弟、妹、孫、息子など）が直接呼びかけ語として用いられないが、中国語ではそういう制約がなく、広範囲に使用される。これについて、次のⅡ．親族呼称の言及機能；Ⅲ．親族呼称の呼びかけ機能のところで詳しく論ずることとする。

しかし、一世代を隔てた関係にある人、父母の兄弟姉妹、姻戚などについての親族呼称はどのようなのであろう。

中国語	日本語
祖父, 爷爷	祖父 } おじいさん
外祖父, 姥爷	外祖父 } おじいさん
祖母, 奶奶	祖母 } おばあさん
外祖母, 姥姥	外祖母 } おばあさん
伯父, 伯伯 (父の兄)	伯父, 叔父 おじさん
叔父, 叔叔 (父の弟)	
姑父, 姑爹 (父の姉妹の夫)	
舅父, 舅舅 (母の兄弟)	
姨父, 姨爹 (母の姉妹の夫)	伯母, 叔母 おばさん
姑妈, 姑姑 (父の姉妹)	
伯母, 大娘 (父の兄の妻)	
婶娘, 婶婶 (父の弟の妻)	
姨妈, 姨姨 (母の姉妹)	兄嫁, お姉さん 義兄, お兄さん 義弟, 弟 義妹, 妹
舅母, 舅妈 (母の兄弟の妻)	
嫂子, 嫂嫂	
姐夫 (姉の夫)	
妹夫 (妹の夫)	
弟妹 (弟の妻)	

叔伯哥哥, 堂哥 (父の兄弟の息子, 自分より年上)	
叔伯弟弟, 堂弟 (父の兄弟の息子, 自分より年下)	
堂姐 (父の兄弟の娘, 自分より年上)	
堂妹 (父の兄弟の娘, 自分より年下)	
表哥 (いとこのうち, 父の兄弟の子以外の男子, 自分より年上)	{ 従兄弟, 従姉妹 いとこ
表弟 (いとこのうち, 父の兄弟の子以外の男子, 自分より年下)	
表姐 (いとこのうち, 父の兄弟の子以外の女子, 自分より年上)	
表妹 (いとこのうち, 父の兄弟の子以外の女子, 自分より年下)	
姪子 (兄弟の男の子)	{ おい
外甥 (姉妹の男の子)	
姪女 (兄弟の女の子)	{ めい
外甥女 (姉妹の女の子)	
孙子 (息子の男の子)	{ まご まご娘
孙女 (息子の女の子)	
外孙子 (娘の男の子)	
外孙女 (娘の女の子)	

以上の用例を見てみると、日本語の一つの親族呼称に対して、中国語では二つ以上の親族呼称が用いられている。「祖父、外祖父」「伯父、叔父」などの場合、書面上確かに区別し、表記は二種類となっているが、話し言葉となると、「そふ、おじいさん、おじ、おじさん」と、発音が一つとなっている。そして、「嫂子」——「お姉さん」、「姐夫」——「お兄さん」というふうに一対一のようににはなっているが、実際、日本語の「お姉さん」「お兄さん」は二つ以上の親族関係を表している。

一番多いのは「イトコ」で、中国語では八種の親族呼称も用いられている。逆から言えば、中国語のこれらの親族呼称を厳密に翻訳しようと思ったら、対訳でなく、説明的な言葉を使用しなければならない。

中国語の親族呼称は個々の親族関係ごとに特定の用語を用い、詳細な記述体系となる。「中日大辞典」<sup>2)</sup>の「親族関係表」に載っている中国語の親族呼

称をざっと数えてみたら、216ケにもなっており、この夥しい数字からも分かるように、中国語の親族呼称は余りにも複雑で、外国人はもちろん、中国人でもそれを理解し、把握するには一苦労しなければならない。特にここ20年来、一人っ子政策が押し進められ、今後相当多くの親族呼称の意味そのものを理解するのも一層困難をますであろう。

それに対して、日本語のほうは、幾つかの親族関係を一つの用語で表し、概略的な類別体系となっている。例えば、父親の兄弟、母親の兄弟及び父母の姉妹の夫、その6種の異なる関係にある人をすべて「オジサン」という一つの言葉で概略している。同じ「オジサン」と表する人が、一体自分の父母とどんな関係にあるのか、呼び名からだけでは、分からないもので、次の、

「おじさん。おじさんはぼくのパパの弟に当たるの？」

「ちがうよ。おじさんはママの弟だよ」<sup>3)</sup>

のような会話が日本語では成り立つ。中国語では、それぞれの関係ごとに呼び名が違うから、あまりこういう類の会話が行われない。

なお、中国語の親族呼称は、極めて父系的で、家、家族、同じ姓を持つ間柄が大変重要視されるのである。例えば、父方の兄弟でも男性の場合、長幼を明確に区別し、それぞれ違う名称を与えられているが、女性となると、長幼を区別せず、一まとめにして同じ呼び名で言われている。そして、母方の兄弟となれば、男性も女性も年長者、年少者の区別がなく、一つの用語で概略されている。

また、同じ父母を持つ兄弟、姉妹と日本の法律によれば四親等に当たる父方の男性兄弟の子女をへだてず、「堂兄弟、堂姐妹」を含めた兄弟姉妹、即ち同じ姓のものの中で、最年長者が「大哥」、その次「二哥」というふうに呼ぶならわしが、大家族の遺風をなお保っている家庭において、まだ残っている。それは、中国社会の「传宗接代」（代々血統をつぐ）という思想の強い表れではないかと思う。

それに対して、日本語ではこういう母方か父方の考えがあまりなく、「家」や「血縁関係」に対する認識も全く異なる。父母、子供、兄弟姉妹に関する

呼称は、男女、長幼の区別がなされているが、三親等の「オジ」「オバ」となると、長幼を区別しなくなり、四親等の「イトコ」となると、男女の性別も目上や目下も分けないこととなる。つまり親等が遠くなるにつれ、男女、長幼の区別もすべてなくなってしまう。

以上から分かるように、同じ親族関係にある人に対して、中国人と日本人が感じる親しみの度合いが異なり、つまり、親疎の尺度が違うということである。

それから、同じ親族呼称で呼ばれている人について、中国語と日本語では、それぞれどう区別して呼んでいるであろう。「华姑、洪表姐、龙叔」「よしこ姉さん、和夫おじちゃん」のように、「名前＋親族呼称」の形は、中国語も日本語も用いるが、そのほかに、中国語では「大哥、二姐、三叔、四姑」のように「数字＋親族呼称」（「一」の代わりに「大」を用いるのがふつう）の形も用いたりする。それに対して、日本語では「東京のおじさん」「大阪のおばさん」のように「地名＋親族呼称」或いは「名古屋の道夫おじちゃん」というふうに「地名＋名前＋親族呼称」の形で呼ばれたり、言及されたりする。

## Ⅱ. 親族呼称の言及機能

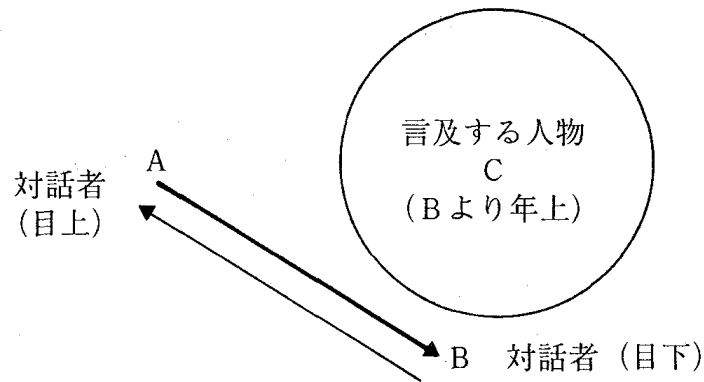
言及とは「あることについて言い触れる」ことであるが、家庭内での会話の中で、自分自身や相手、或いは第三者である親族について言及する場合、親族呼称がどう使用されているのであろう。

### Ⅱ－１. 第三者の親族に言及する場合

#### Ⅱ－１－１. 言及する人物（Ｃ）が対話者同士（Ａ，Ｂ）の目下の方（Ｂ）より年上である場合

##### イ 目上（Ａ）が話し手、目下（Ｂ）が聞き手

言及する人物（Ｃ）が目下のＢより年上の親族である場合に、中国語でも日本語でも、目上の話し手（Ａ）はこの人物を自分の立場から直接とらえないで、目下の聞き手（Ｂ）の立場から言語的に把握する。例えば、



(1) (父が子に)「新儿, 爷爷的脾气你是知道的。(新くん, おじいちゃんの性格を知っているだろう)」《家》

(2) (祖父が孫に)「你二哥到哪里去啦? (お兄ちゃんはどこ?)」《家》

(3) (オバがオイに)「わかったわ, 父さん (オイの父親) に言うわ」《北》

親族呼称というのは、本来すべて自己中心語 (egocentric particulars) なのであるが<sup>4)</sup>、この場合、自己中心語としてではなく、自分以外の人 (聞き手) の立場を原点とした他者中心的な用法なのである。話し手 (父親, 祖父, オバ) は聞き手 (子, 孫, オイ) の見地を経由して、言及する人物を見直すのである。これを鈴木氏が「共感同一化 (empathetic identification)」と呼ぶ<sup>5)</sup>。つまり、目下の立場に自分の立場を同一化しているのである。

ロ 目下 (B) が話し手, 目上 (A) が聞き手

この場合、中国語も日本語も話し手 (目下) 自身を基準にした親族呼称を用いる。

例えば、

(4) (子が母に)「妈妈, (我)奶奶呢? (お母さん, おばあちゃんは?)」

(5) (オイがオバに)「お願いします, 父さんにたのんで下さい」《北》

ただし、中国語では、「我奶奶」というふうに、親族呼称の前に「我」を加えてもいいが、日本語では、この場合、絶対「私のおばあちゃん」と言わないようである。

ハ 夫婦同士の対話

まず用例を見てみよう。

(6) 「红他妈、爹已经吃过药了吗？」[红（子供の名前）のお母さん、お父さんはもう薬を飲んだ？]

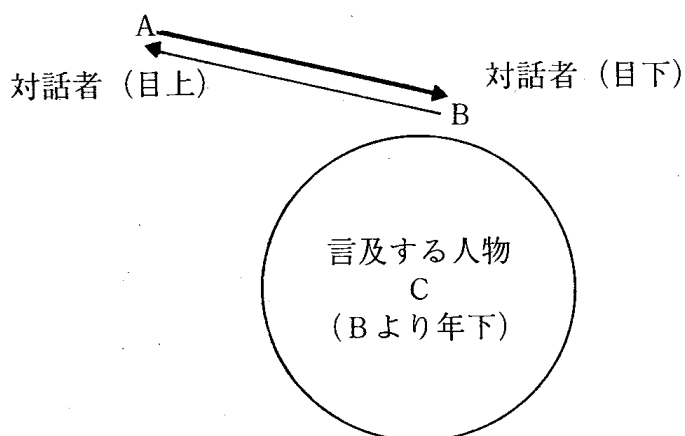
というふうに、中国語では言及する人物を直接自分の立場からとらえ、自分を基準にした親族呼称を用いる。

それに対して、日本語のほうは、

(7) 「お母さん、おじいちゃんはどう薬を飲んだ？」

のように、自分の立場からでもなく、相手の立場からでもない、いわゆる第三者（家族の最年少者）を基準にした親族呼称で言及する人物をとらえることもある。

## Ⅱ－１－２．言及する人物（C）が対話者同士（A，B）の目下の方（B）より年下である場合



(8) (母が子に) 「小明，去把小弟叫来」

△ 「明，弟を呼んできて」

(9) (子が母に) 「妈妈，我老妹上学了？」

△ 「お母さん，妹は学校に行った？」

(10) (妻が夫に) 「儿子今天怎么没精神呢？」

△ 「息子は，今日何だか元気がないようですね」



以上の(8)~(10)の用例を見てみよう。中国語のほうはすべて目下（同世代の場合、自分達の）の視点からとらえた親族呼称を用いる。それに対して、「弟、妹、息子」などのような目下の概念を含む言葉が日本語では、他称詞としては用いられない。この場合、「けん、よしこ」などのような個人名を使用しなければならない。

## Ⅱ-2. 自分自身について言及する場合

### イ 目上が話し手、目下が聞き手

この場合、目上は目下に対して、自分を目下の立場からとらえた親族呼称で言える。この点において、中国語も日本語も同じである。

- (11) 「瑜儿，娘叫你，你能听见吗？（瑜，お母さんが呼んでいるのがきこえる）」《药》

- (12) 「これはお父さんがあずかります」《北》

しかし、中国語では、あくまでも相手自身の立場を原点とした親族呼称を使用するので、

- (13) 「おい、ちょっとおじいさんの肩を揉んでくれないか」

のような中国語の文はそのまま直訳して孫には言えるが、息子や嫁に対しては「おじいさん（爷爷）」を「おとうさん（爸爸）」<sup>6)</sup>と改めなければならない。

### ロ 目下が話し手、目上が聞き手

中国語では目下の概念を含む言葉が自称詞になるが、日本語ではこういう用法がない。例えば、

- (14) 「娘，孩儿不孝，您老多保重（お母さん，息子（私）は親不孝者です。どうかお体を大切に）」《药》

それに対して、日本語では目下の話し手が目上の聞き手に対して、自分を名前で称することが可能である。中国語では名前があまり自称詞としての用法が見られない。例えば、

- (15) （蛍という女の子が兄に）「蛍も行く」《北》

この用法は、小さい女の子には多く使用されるが、年齢が大きくなるにつれ、20歳ぐらいになると、かなり減ってくるようである<sup>7)</sup>。それも両親や年上

の兄弟、親しい友人、同級生を相手とする時に限られており、大学の先生や見知らぬ人に使う人が今回の調査では一人もいなかったのである。名前を自称詞としての用法は、気どらない相手にしか使えぬ、一種甘えた表現かもしれない。

## Ⅱ－３．相手（聞き手）について言及する場合

### イ 目上が話し手，目下が聞き手

中国語では人称代名詞のほかに、目下の概念を表す言葉も使用するが、それに対して、日本語では人称代名詞しか使用しない。例えば、

(16) 「二弟的工作找到了吗？（二番目の弟〈きみ〉の仕事がもう見つかった？）」

(17) 「きみの車はどれ？」

### ロ 目下が話し手，目上が聞き手

(18) 「爸爸，这本书是您的吗？（お父さん，この本はあなたのですか）」

(19) （メイがオジに）「おじちゃん泣かしたの」《北》

この場合、中国語も日本語も目下からとらえた親族呼称を使用するが、中国語では、親族呼称のほかに、(18)のように人称代名詞「您」も使用できる。ふつう、同世代、年齢の差があまりない年上に「你」、異世代、年齢の差が大きい年上に「您」を使ったりする。

## Ⅲ．親族呼称の呼びかけ機能

「呼びかけ」とは、「自分の方に注意を向けさせるために、ある人に向かって声をかける」という意味であるが、家庭内においてお互いにどう呼びかけているであろう。

### Ⅲ－１．目上に呼びかける場合

まず、用例を見てみよう。

(20) 「大哥，你放心好了（お兄さん，ご安心下さい）」《家》

(21) 「爹，我还年轻呢（お父さん，ぼくはまだ若いですよ）」《家》

(22) 「おじさん、食料運んできたよ」《北》

(23) 「お父さん、二階寒くてたまりません」《北》

以上のように、中国語も日本語も親族呼称を用いて、目上の親族に呼びかけたりする。しかし、中国語ではいつも自分自身を基準にし、自分の立場からとらえた親族呼称で相手を呼び、もし、子供などの第三者を原点とした親族呼称を用いるなら、その親族呼称の前に必ず「孩、孩子、他、子の名前」などと言ったその子供を表す言葉をつけ加えなければならない。日本語のように、自分の父母を「おじいさん、おばあさん」のようなはだかの祖父（母）の概念を含んだ言葉で称さない。例えば、「孩他爷、小红奶奶」というふうに呼んだりする。<sup>8)</sup>

それに対して、日本語では家庭の中での最年少者を基準にし、その子の視点からとらえた親族呼称を用いるのが多いようである。自分の父親や母親を「おじいさん」や「おばあさん」などと呼んだりする。

### Ⅲ－２．目下に呼びかける場合

まず、日本語の用例を見てみよう。

(24) （母が子に）「お兄ちゃん、ここにおいで」

(25) （老婦人が自分の娘に）「ママ、ここにいらっしゃい」

のように、日本語では、目下に対しても、目下概念を含んだ呼称（息子、娘、弟、妹など）を使わず、末子からとらえた目上概念を表す呼称（お兄ちゃん、パパ、ママなど）で呼びかける。つまり、目上は相手を直接自分の立場から見ることがせず、末子の立場を迂回して間接に捉えようとする。

一番究極的な用例は、末子本人に呼びかける場合であろう。この場合は第三者の立場を借りないで、その当の本人の視点からとらえようとする。そうすると第一人称「ぼく（あたし）」を使うことになる。

(26) 「ぼく、これが欲しいんでしょう」

のように。

この用法の理由としては、田窪氏が次のように説明している。<sup>9)</sup>

「相手が『君』という時、それが自分のことであると理解するためには、

相手の視点から見た呼びかたを取り入れている必要がある。つまり、『相手から見た〈おまえ〉＝私から見た〈私〉という視点の切り替え操作が必要となる。これは、結構複雑な操作で、子どもには難しい』

この説明には納得が行かない。なぜなら、どの社会の子供にとっても、「君」と「私」いわゆる自称詞と対称詞の区別が難しいということには変りがないのに、こういう用法は他の社会ではあまり見られないからである。そして、こういう自称詞を対称詞としての用法〈われ、自分〉が、日本語では、大人にも行われているから、別の理由を考えなければならない。

「ぼく」という言葉の対称詞の用法が、家庭では母親に多く用いられることと<sup>10)</sup>日本の高度成長以降使用されはじめたことから<sup>11)</sup>日本の家庭環境によってこういう用法が生まれたのではないかと考える。日本の家庭では、父親が企業戦士と言われるほど、家庭での存在感が薄いから、母子が互いに頼りあい、母親が自分の子と一体になりたいという願望が強くあるからなのではないかと思う。

次は中国語の用例を見てみよう。

(27) (イトコ同士)「梅表妹，我全明白了(いとこの妹，私はすべて分った)」  
《家》

(28) (妹)「二姐」

(姉)「哟，四妹来啦！（あら，四番目の妹，よく来た）」《礼》

(29) (父が子に)「闺女，你跑那么快干啥？（娘よ，きみがなんでそんなに早く行くのかい）」《红》

以上の用例から分かるように、中国語では目上の話し手が、目下の聞き手を直接自分の視点から見た親族呼称で目下概念を表す言葉（妹，娘，いとこの妹など）を使用する。

相手と自分との関係に基づいていない呼び方には、「小弟（妹）」というのがあるが、それは唯一の例外ではないかと思う。そして、「小弟（妹）」には自分の「弟（妹）」という意識が非常に薄く、むしろ「かわいい子供さん」という意味あいが強いのと思う。その証拠に「小弟（妹）」という呼称に、一

文字を加えた「小弟弟（妹々）」という言葉は、全く親族関係のない、外の見知らぬ子供にも使用されている。

もう一つ興味深いのは、中国語では、親などの目上が子供を怒る時、「李小红，别吵了」というふうにフルネームを使うことがよくあるが、日本語では「山田よしこ，静かに」のように決して言わない。

### Ⅲ－３．夫婦同士

夫婦同士がそれぞれ相手をどう呼んでいるだろうか。

まず、中国語のほうを見てみよう。文学作品やアンケート調査<sup>12)</sup>によると、名前とフルネームが圧倒的に多く、そのほかに、愛称や「小十姓」「老十姓」などの形もある。また「栓他爹，他娘」のように、子供を介在して、「子供の概念を表す言葉（子の名前，孩，他など）＋（父親（母親）の概念を表す言葉（爹，爸，娘，妈など）」というような形も使われるが、これは農村や商売人などのことを扱った文学作品《药》，《红高粱》に多く見られるが、大学卒，インテリの家庭を描いた作品《家》ではこういう子供を介在した言い方が見られなかった。この点について、今度のアンケート調査にも裏づけられている。70人のうち、90%以上の家庭では名前とフルネームで呼びあい、そのほかに、わずかながら、「哎，喂」などの応答詞，「夫人，老婆，太太」などの妻の概念を表す言葉，「先生，当家的」などの夫の概念を表す言葉で呼びあったりしている。

また、日本語関係者の間にしか見られない呼称だが、夫婦同士で「楊さん，肖さん」というふうに，「姓＋さん」で呼び合う家庭がある。発音は日本語だが，日本の習慣に合わない，そのどっちつかずの呼び方からも，母国語の文化背景の力強さが感じられる。

それに対して，日本の夫婦同士ではどうなのだろうか。最近の調査<sup>13)</sup>によると，「お父さん，お母さん」派がもっとも多いということである。そのほかに「パパ，ママ」もあり，孫が生まれてから「おじいちゃん，おばあちゃん」が優勢になるということである。一番興味深かったのは，日本の夫婦呼称のアンバランス，妻が夫を「〇〇さん」とさんづけの呼称で呼ぶに対して，

夫が妻を名前呼びすてとさんなしで呼ぶ。また、妻が夫を「あなた」と、夫が妻に対して「おまえ、きみ、おい、ちょっと」と呼ぶ。つまり、日本人の妻が恭しく、極めて丁寧な呼び方をしているが、その配偶者の夫が高姿勢で、極めて乱暴な呼び方をしている。

その一方、「粗大ゴミ」「ぬれ葉におち葉」などの表現から窺えるように、今まで大変威張っていた「御主人」が定年になってから「ゴミ」としてしか扱われず、大変気の毒にも感じられる。

### 三. 親族呼称の拡大用法

呼称語は話し手、聞き手の位置関係や話の場を最も鋭敏に反映する言語分野で、相手をいかに呼ぶかによって、その関係は近くもなれば遠くもなる。人間関係をなごやかにさせるために、どんな社会においても、心配りをしているのであろう。ここで家族以外の、実際に血縁関係のない他人を相手とする場合における中国語と日本語の親族呼称の使用法について見てみよう。

#### I. 積極的、広範囲と消極的、狭範囲

まず、日本語の用例を見てみよう。

- (30) 「おじさん、豆ちょうだい」
- (31) 「おねえちゃんのパパ、おばさんが探してあげましょう」
- (32) 「お父さん、これについてどう思いますか」
- (33) 「お母さん、服をもっと上にあげてくれない」
- (34) 「おねえさん、いつものものよ」

のように、(30)は小さい子供が大人に言う場合だが、自分を基準にし、推測した大人の年齢によって、「お兄さん、お姉さん、おじいさん、おばあさん」のうちのどちらかを選んで使うであろう。

(31)は、迷子になった子供に気づいた大人が言う用例だが、これは家庭内用法と同じく、目上が目下を直接目下概念を含む言葉でとらえないで、そこに

いない目下よりもっと目下の人物を想定してその第3者の視点から当面の相手をとらえていく。

(32)は、学校の先生は生徒の立場に立って、その親をとらえている。(33)は(32)と同じく、病院の看護婦は患者（子供）の立場に立って、その親をとらえている。

鈴木氏によると、「父及び母の概念を含むものは、少なくとも標準的な東京語では殆ど使われないうである」<sup>14)</sup>ということであるが、実際病院や幼稚園から高校までなどの教育機関で、(32)(33)のような呼び方が広く使われているようである。

(30)～(33)というのは虚構的用法に入ると思うが、(34)については年齢階梯語的用法という見方がある。<sup>15)</sup>「若い娘さん」つまり、この場合の「お姉さん」は個人親族語の「お姉さん」弟に対する「お姉さん」でなく、「若い人」という意味の年齢階梯語という説である。

筆者がこれはむしろサービス業の人に対して使う用語と考えたほうが適当ではないかと思う。なぜなら、70代の男性客が酒屋などで、50を超したと見える店員にも「お姉さん」と呼びかけているから、年齢の区分のしかたが変わってきて、50代は老年に入るかどうか、見方が違うが、もう青年でなく、中年に入るのであろう。言いかえれば、「お姉さん」というのはサービス業、特に飲食店で仕事をする女性を少し見下した感じで使う呼称ではないか考える。

一方、中国語の呼びかけは、単に相手の注意を促すだけでなく、親しさや敬意を表すために用いられる。地位の上下関係に基づく日本語の敬語に対して、親疎を尺度にする中国語の敬語の中で、対人呼称は大きな比重を占めている。全く血縁のない相手と呼ぶ時でも、親しみを持ち、相手に近づき、仲よくしようと思えば、積極的に多く親族呼称を使用する。例えば、

(35) 「老栓叔，小栓弟的病怎么样（老栓おじさん，小栓〈弟〉の病気はいかが？）《药》

(36) 「四奶奶，买豆（おばあさん，豆を頂戴）」《药》

(37) 「妹妹，你大胆往前走（さあ，妹よ，勇気をもち，前に向かって突き進め）」  
《紅》

のように，家庭内での用法と同じく，自分を基準にして，相手がもし親族だったら，自分の何に相当するかを考え，その関係にふさわしい親族呼称で呼びかける。その場合，目上だったら，「叔，奶奶」のように，目上の概念を含む言葉で，目下だったら，「弟，妹々」のように目下の概念を言葉で呼びかける。

さらに親しくしようと思えば，年少者が相手に拝礼をして親属同様の関係を結び，互いの年齢の差によって，相手を「干哥（姐）」、「干爹（妈）」と「干爷爷（奶奶）」と呼んだりする。逆に，義を結んだ関係にある年長者がその年少者を「干弟（妹）」「干儿子（姑娘）」「干孙子（孙女）」と呼んだりする。

次は「芙蓉鎮」「药」「紅高粱（紅いコーリャン）」などの中国の映画の脚本及びその日本語訳について調べた結果を見てみよう。

まず，「芙蓉鎮」から見てみる。

中国語の原文では全く血縁関係の他人に親族呼称を26ヶ使用してある。その内，言及の用例は4種類，7個で，一応親族呼称を含めた言葉に訳した用例は，次の三つである。

干爹——子供の父親役

干哥——兄貴分

干妹——妹分

もう一つ「桂桂兄弟」は「あの男」というふうに普通名詞に訳してある。

そのほかは，直接呼びかける用例であるが，

a. とても親しい友達同士の場合

芙蓉姐——玉音さん（「芙蓉姐」の本名「胡玉音」），きみ

满庚哥——リーさん（满庚の姓は黎）

玉音妹子——玉音

以上のように，日本語訳は「名前」「名前＋さん」「姓＋さん」「対称詞」となっ



ている。

b. 店員が客に

「大娘请坐」——（省略）「どうぞお掛け下さい」

これは一例しかなかったが、日本語訳はそれに触れず省略している。

c. その場しのぎ、ごまかし

嫂子——すみません、どうも

これは胡玉音がお金を隠してもらうために、干哥黎满庚に渡し、その家を出ようとしたところ、黎の妻が戻ってきて、胡が黎妻にあいさつしたところである。

d. 恐れ多い場合

国营大姐——国营の方ね

20数年前の中国で、個人経営者が国营の店の人に頭をさげていたのである。

次は、「药」については、中国語の原文では、血縁関係のない他人に対して、41ヶ所に親族呼称が用いられているが、日本語訳では、三ヶ所しか親族呼称が使用されていない。その三ヶ所とも同じく「四奶奶」であるが、日本語訳では「おばさん、ばあさん、おばあさん」とそれぞれ違う訳が出ている。そのほか、省略したり、「姓（名）＋さん、姓（名）の呼びすて、対称詞（あんた）」のようにになっている。

「红高粱」については、中国語の原文では、21ヶ所に親族呼称が用いられているのに対して、日本語訳では、それを省略したり、姓（名）＋さんとなったりして、親族呼称を用いたのは一ヶ所もなかった。

以上の比較から、中国語では全く見知らぬ他人には冷たい態度を示し、言葉も極めて疎遠であるが、一旦親しくしようと思ひ、或いは近づけようと思えば、相手を自分の家族のように扱い、積極的に親族呼称を使用している。

それに対して、日本語では、ごく限られたケースを除けば、血縁関係のない他人に親族呼称で呼ばれるのを大変不愉快に感じ、お互いにある程度の心理的距離を保ち、あっさりとした、べたべたならぬ関係を維持したほうがベターと考えられ、そのため、親族呼称の使用を極度に控えているように思わ

れる。

## II. 輩数（ジェネレーション）の高い親族が尊敬表現になるか

「日漢辞典」のほとんどは

「おばあさん」——「奶奶」

「おばさん」——「阿姨」<sup>16)</sup>

のようになっており、そして最新版の日本語の国語辞典の「おばあさん」「おばさん」の項に、

「おばあさん」——「女の老人を尊敬して（親しんで）呼ぶ語」《学》

「年をとったよその女の人に対する親しみをこめ

た言い方」《例》

「おばさん」——「（主に年少者が）よその大人の女性を親しんで呼ぶ称。」《学》

を見ても、中国語の使い方とほとんど同じようであるが、実際の使い方を見てみると、かなりの相違があるように思われる。私事にわたって恐縮だが、まず筆者の経験した幾つかのエピソードを紹介する。

日本から何人かの知り合いがペキンを訪れた時のことである。2歳ぐらいの息子が初対面のみなさんに「阿姨好（おばさん、こんにちは）」とあいさつしたら、「おばさんよりお姉さんと呼ばれたいですね」とある知り合いが言った。その人はすでに18歳の娘をお持ちのお母さんである。もう一人、60代ぐらいの方に、「息子が何とお呼びしたらよろしい？」と伺ったところ、「阿姨（おばさん）でいいですよ」という返事であった。

中国人の慣習から考えれば、子供が大人を呼ぶ時は、自分の兄や姉ぐらいの年格好の人でも父母の世代に当たる呼称である「叔叔、阿姨」と呼ぶ方が喜ばれる。2、3歳ぐらいの子供が60代の銀髪の方を「阿姨」と呼ぶのは、失礼極まりのないことで、子供の両親の常識が疑われるし、呼ばれたほうの年配の方も腹が立つまでは行かなくても、あまりいい気にはならないであろう。

中国人は、相手に尊敬の意を表すために、その人の実際年齢よりも一世代、二世代も上の方の呼び名を使うのがふつう。つまり、

「哥哥」→「叔叔，伯伯」→「爷爷」

「姐姐」→「阿姨」→「奶奶」

というように、敬意がだんだん高くなる。呼ばれた方も、一世代、二世代と、できるだけ上の世代の方の呼び名で呼ばれた場合、なにか得したような感じがするようである。

それとは反対に、下の世代の呼び名で呼ばれたら、損をしたかのようなのである。例えば、男の子供同士がいじわるをする場合、まだ子供なのに、相手に自分のことを「爸爸」と呼ばせたり、「爷爷」と呼ばせたりすることがよくある。

要するに、相手に自分より輩数の高い呼称を用いれば、尊敬となり、反対に自分より輩数の低い呼称を用いれば、「你是我儿子（おまえはおれの息子だ）」と言えは、「このろくでなしめ」という罵りの意味になる。

そして、親族呼称が国家指導者や著名人に対しても使用される。例えば、「邓奶奶（鄧穎超、故周恩来首相夫人）」、「邓爷爷（鄧小平）」などのような表現は子供を対象にする新聞記事などでよく見られる。そう呼ばれていると、高い地位にいるにもかかわらず、いかにも庶民から親しまれ、尊敬されているイメージがある。

また、「工人叔叔（労働者おじさん）、农民伯伯（農民おじさん）、售票员阿姨（車掌おばさん）」のように、職業名にも多くつけられる。

一方、日本語の方を見てみると、「おばあさん」のような日本語の親族呼称は辞書にかかれたような用法とは、ずれが生じているようである。

年を取っても、「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれることに抵抗を感じ、自分の孫に「大パパ」「大ママ」と呼ばせている人もいるほどである。

大学の研究者や高校教師などによるグループ「現代日本語研究会」は、1992年出版した本《女性の呼び方大研究》（三省堂）で、「おばあちゃんと呼ばないで」と提唱した。

なぜ、このような変化が生じたのであろうか。医学技術などの進歩で、「人生50年」や「70は古稀」などはすでに昔話のようになり、日本人の寿命が急速に伸び、金さん、銀さんのような100歳を超えた元気な高齢者も多くなってきた。辞書によると「初老——もと40歳の別称、現在では60歳前後を指す」とあるが（《学》）、60歳になっても元気一杯第一線に活躍している人が大勢いるのが現状である。一体、何歳からは老人であるについては、個人差が大きく、定説がないようである。

そして、年を重ねることによって得た経験、「老い」の智恵などは、昔大事にされていたが、現在では無視されることが多く、人々の価値観も変化し、多様性を示している。

もともと、尊敬や親しみがこめられているはずの「おばあさん」という言葉も、「役立たず、生産性、価値のないおいぼれ」というイメージが強くなり、呼ばれた方が不愉快に、見下されていると感じるのも無理はない。

「亀の甲より年の功」という考えから「若さが一番」へと変ったことによって、呼称にも変化がもたらされたのであろう。

#### 四. 終　　り

以上、中国語と日本語の親族呼称について見てきたが、あくまでも一般的な現象を述べたもので、個々の家庭では、さまざまな原因によって、以上述べた原則を破ることもあろう。

そして、社会の変動によって、言語のさまざまな面にも変化の大波が打ち寄せてきているから、言語教育者として、言葉だけではなく、社会の実状や文化などの変化にもたえず目を注がなければ、とつくづく思うのは現在の心情である。

本稿を成すにあたり、多くの先生方より貴重なご教示をいただきました。ここに記して深謝いたします。

## 注

- 1) 江口 (1992) p. 84
- 2) 《中日大辞典》愛知大学中日大辞典編纂処 (1992) 大修館書店
- 3) 《学研国語大辞典》金田一春彦 (1993) 学習研究社 (以下《学》と略す)
- 4) 鈴木 (1973) p. 164
- 5) 鈴木 (1973) p. 168
- 6) 子供持ちの息子や娘及びその配偶者に対して、父親や母親はまだ「爸爸」「妈妈」などを自称詞として使うかどうかについて、文学作品では用例が見当らなかったが、20人のインフォーマントのうち、8人は使用することであったが、さらに詳しく調べなければならない。  
一方、日本語のほうは、大学生になってから、親が親族呼称を使うのは好ましくないと言われているが、実際、今度愛知学泉大学及び短期大学で、一年生を対象に行ったアンケート調査によると、かなり多くの家庭では、親が子に対して親族呼称を使用している。「ご両親はあなたにどう自分のことを言っていますか」に対する答え。

	お父さん		お母さん	
男生 88人	32人	47.7%	37人	61.8%
女生 107人	72人	70 %	86人	82.7%

- このアンケート結果については、人数が少ないうえ、範囲もごく限られているため、地域性や家庭環境などの影響もあるだろうが、一つの参考になる。
- 7) 6) でふれたアンケート調査では、女性107人の中、名前を自称詞として使う人は10人であった。
  - 8) 配偶者の両親を「爷爷、奶奶、姥爷、姥姥」と呼ぶ例は、二、三の家庭で聞いたことがあるが、それはどのぐらいの普遍性を持つかは、さらに調べてみなければならない。
  - 9) 田窪 (1992)
  - 10) 詫摩 (1993)
  - 11) 鈴木 (1973) p. 172
  - 12) 1993年1月、中国の北京、成都などで大学の教師、医者、研究者などを対象に、呼称についてアンケート調査を行った。
  - 13) 「読売新聞」1993年11月20日〈編集手帳〉
  - 14) 鈴木 (1973) p. 158
  - 15) 渡辺 (1979)
  - 16) 「おばあさん」の日本語訳としては、「外祖母、祖母、外婆、姥姥」などあるが、血縁関係のない他人に対しては、「奶奶」が一番多く用いられるので、ここで「奶奶」のみあげた。「阿姨」もこれと同じ理由による。

資料として扱った文学作品

《家》巴金（1937）上海电影制片厂 电影完成剧本〔シナリオ作者 陈西禾〕

《药》鲁迅（1931）长春电影制片厂 电影完成剧本（1981）〔シナリオ作者肖尹宪  
吕绍连〕日本語の字幕は東光徳間発売のビデオによる

《红高粱》莫言（1987）西安电影制片厂 日本語訳は徳間コミュニケーションズ発  
売のビデオによる

《芙蓉镇》阿城 谢晋（1987）上海电影制片厂 日本語訳は東和ビデオによる

《礼貌语言手册》北京語言学会（1983）北京出版社

《北》「北の国から」（1988）倉本聰 理論社

《例解新国語辞典》林四郎（1991）三省堂